



# 青葉の森公園芸術文化ホール イベントレポート

当ホール主催の公演・講座の雰囲気をおみなさまに発信する「サポーターライターズ」の方によるレポートをお届けします。

## EVENT REPORT

平成30年  
2月11日[日・祝]

### 「青葉能」事前セミナー

講師 後藤和也 (能楽研究家)  
小山弓弦葉 (東京国立博物館研究員)  
聞き手 山井綱雄 (金春流能楽師)

#### 文

禄3年(1594年)、今からおおよそ400

年前のこと。57歳の太閤秀吉は、吉野で盛大なお花見を催しました。本日の進行役、能楽師、山井綱雄氏(本公演でシテをつとめます)によれば世紀の《大どんちゃん騒ぎ》。お供はなんと5千人。五日に及ぶ宴の席で歌の会、茶の会、能の会をおこないました。

〈能に取りつかれた〉権力者秀吉は、山井氏属する金春流を殊のほか愛でた大パトロンなのですが、時代の第二級資料『駒井日記』によると、この時、宇喜多秀家(現在の岡山周辺を広く治めていた大名です)が秀吉の前で【夕顔】を舞ったとあります。

しかし、現在の金春現行謡本に【夕顔】はなく、NHK

大河ドラマ「真田丸」で能舞指導と実演を手がけた山井氏、劇中、まさにそのシーンで【夕顔】を演じることができませんでした。

その口惜しい思いを金春流八十世宗家、金春安明先生に激白したところ、「(夕顔)あるよ」と安明先生、いともかんたんにおっしゃったそうです。

歴史にうずもれて長年舞われることがなかったということでしょうか。今回、第37回青葉能演目にある【夕顔】は、学者でもあられる安明先生の手による復曲です。他流派でも行われる復曲ですが、自前で自前で復曲できる金春流。誇らしい思いだと山井氏は語っていました。

今回の復曲について、安明先生は、「スライド翻訳したので暗唱し辛い節になっている」とコメントされていたそうです。

山井氏もまた、「どう表現するか、どう型で表すか、あえて何もしないでハラで表現するか、他流上演も参考」に「ギリギリまで考察と稽古を重ね」、臨むとおっしゃっていました。

唐織【紅萌黄段敷瓦菊薄模様】

明治維新以降東京国立博物館に収められた旧金春一号唐織、



つまり、金春宗家一番のお宝

能装束が、円満井会創立三十周年を記念して模織されました。今回の公演で使用されるこの衣装を前に、東京国立博物館研究員、小山弓弦葉さんが、お話しくださいました。

秀吉より賜下された拝領品で、訳あって、東京国立博物館が引き取ったお品だそうです。模織された装束は文字通り絢爛豪華。特別な技術を要する織は、京都西陣佐々木能

衣装で再現されました。

絵柄は秋草に(のし)。贈り物。吉祥めでたい(花のし)。江戸時代、織の技術が急激に躍進し、多色織、七色八色織が可能となりましたが、金糸を織り込む技術のなかった頃は中国からの輸入に頼るほかなかったそうです。

能上演時間

現代、能上演にかかる時間はおおよそ一時間半から二時



間。能研究家、能楽師でもある後藤和也さんによると、当時の能演記録に時刻の記入があつて、それによると、どうやらそのころ、能一曲上演するのにかかる時間は短くて、三十分もあれば舞い終えた。スピーディーなものだったようです。【夕顔】の序の舞はなかったかもしれないそうです。

発展、変化は必然性あつてのもの。そうお話しくださった後藤氏。関東でも有数の本格的能舞台と多くの方がおっしゃる青葉の森公園芸術文化ホール、伝統芸能週間(2018年は2月9日から18日までの10日間)は能の空間です。「夢のような能。眠くなったりするかもしれませんが、かまいません。何かを感じて心が洗われるようなことが少しでもあれば嬉しい」と山井綱雄氏はおっしゃいました。

サポーター(ライターズ)も